
時精物語

暁 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時精物語

【Nコード】

N2078F

【作者名】

暁 琥珀

【あらすじ】

嘗ての人々と共に生き、共に戦い、助け合っていた存在、『時の精』。ある日時精は、人々を裏切り、そして消えた。・・・数年後、『時の割れ目』と呼ばれる異空間から、一人の赤子が誕生した・・・。

プロローグ（前書き）

タイトルの読み方は、『ときのせいものがたり』です。
長いので、『時精物語』（ときせいものがたり）・・・。

プロローグ

『ときのせい
時精』

共に生き、共に戦った精

悪しき人々に狙われ、姿を隠した精

そして、何億もの人の生命を奪った精

・・・人々に恐れられ、宇宙そら高く、身を隠した精

数万年後

その精は、この世から消えた
が、人々に平和は戻らなかった

何故なら、精の生命を継ぐ者が、この世に生を受けたから
人々は、小さく幼い精の生まれ変わりを、殺そうとした

・・・赤子は、死ななかった

変わりに、手をかけたすべての人の生命を奪ってしまった

十三年の時が過ぎた

赤子は、少女に成長した
その少女の名を、人々はこう言った

『
白羽
』

ブログ（後書き）

初めての投稿です！！
なにかアドバイスかなんか、ありましたら、教えてください！！

第一夜 蛍

少女は、長い草原の中に、一人立っていた。

蛍が、その草の上を軽やかに飛び、

月と星は、少女と蛍をはつきりと照らし出していた。

高等部で束ねているにも関わらず、地面に付きそうなくらいの長く、白い髪。

白い肌に、淡い、緑色と水色の中間のような色の目と優しい口元。小柄な体には、草原と同じ、薄い若草色の衣を纏っている。

少女の周りには、暖かさと、似合わない冷たい気配が漂っていた。

蛍は、しばらく飛び続けたが、やがてその身を草原に落としていった。

涼しくなりかけた、夏の終わり。

少女は、足元に落ちた蛍を一匹、両手でそっと持ち上げた。

「ありがとう。・・・ゴメンね」

そういつて少女は、その場の土を浅く掘り、蛍を納めた。

少女は、ただ、泣いていた。

小さな涙が、一つ、星屑のような粒になって、茶色い、乾いた土に落ちた。

満月は、その光景を、何も言わずに見ていた。

「どうして白羽は死なず、殺そうとした人たちが死んでいくんだっ
！！」

麗斗は、怒りを床に叩き付けた。

木の幹のような、赤茶色の髪が垂れる。

そして、真実を見極めるような、鋭い茶色の目は、赤々としていた。
赤色を主調とした、長めの布を肩から羽織り、

その先には、オレンジ色の羽根が、アクセントとなって揺れていた。

「長、怒りをお静め下さい。」

麗斗のとなりに居座っている、老いぼれた爺がいった。
長いひげと、白髪のはきは、くしゃくしゃだった。
その発言に、涙を飲む人もいた。

「・・・長は、生まれてすぐに母君を亡くされ、父君も、時精に殺されてしまった。」

集会の後、爺が村の人たちを集め、囁くような声で言った。
人々は、黙って聞いていた。
その中でも、やはり、涙ぐむ人がいた。

「これ以上、犠牲を出したくないと、長は願っておられる。
皆も、長の力になれるよう、頑張るのじゃ。」

それだけ言うと、爺は建物の中に消えていった。
人たちの中に、言葉を発した人は、誰一人いなかった。

「・・・くしゅん。・・・。。?」

その頃、白羽は自分の話しをされていることを、知らないまま、集会にも呼び出されずに、のんびりと薬草を探していた。

団子でポニーテールにしている、銀色に近い白髪が、少々冷たい風に煽られる。

村から、ほんの少し離れたこの場所は、白羽が見つけたものである。夏の夜には、蛍が飛び通い、小川も近くに流れていて、空気はとても澄んでいた。

春には様々な花が、実を結ぼうと、必死に開き、

秋は、山にある、紅葉の木から葉が舞い落ちてきて、草原は紅葉の広場になる。

冬になると、生命いのちあるものが、土の下に眠り、静かな草原に戻るのだった。

白羽にとって、この場所はお気に入りだった。

・・・と、村の方から話し声が聞こえた。

村に続く、細い道からだった。

「まあ、また毒草、探している・・・。」

「私達も、いつ殺されることやら・・・。」

白羽が振り向くと、二人は、

「いきましょ・・・。」

と、小声で呟き合い、早足で村に戻っていくのだった。

もちろん白羽は、毒草など探してなんかない。

村の人々が何故、殺すとかどうかを言うことが、白羽には全くわからなかった。

ただ、勘で思っていることが、

（昔、この村で何かあったんだ。）

と、言うことだけだった。

・・・けれども、白羽は能天気なので、あまり気にせずにのうのうとやっていた。

それだけが、白羽の長所であり、短所であった。

それから少し経った時、

さきほどの、二人の悲鳴が聞こえ、反発的に後ろへと振り返る。

その村の様子を見て、せっかく集めた草を、白羽はその場に落とし
てしまった。

背筋に、冷気が走る。

白羽の目に映ったのは、

村の真上にある、太陽の色と同じ、赤々とした炎に包まれた、小さな村だった。

第一夜 蚩（後書き）

第一夜、書き終わりました！！
感想があつたら、是非お願いします！

第二夜 炎

「た、大変・・・む、村・・・が・・・。」

それ以上は何もいえなくなり、その場に座り込んでしまった。
白羽が混乱するのも、無理は無い。

自分の住んでいる村が、今、目の前で赤々と燃えているのだから。
村から、人々の叫びが聞こえる。
紅く燃える炎。

逃げ戸惑う、人、人、人。

（この感じ、どこかで・・・）

涙目になりながら、そう思った。

確かに、これに似た景色を見たことがある。

なのに・・・思い出せない・・・。

記憶が記憶に、蓋をしまっているように、
今の白羽には、何もわからなかった。

「つつ・・・！！」

激しい頭痛が、白羽を襲う。

立っていらなくなつて、うずくまる白羽。

もちろん、そんな白羽に声をかける人など、誰もいず・・・。

細い細い砂利道を通る、村の人々。

長い草原に、人がいるなんて誰も思ったりしなかった。

自分が助かる為に、山の外へ、遠くへいけるように。

村の中から、赤子の叫び声が響く。

何も出来ない、小さな赤子を、親は見捨てた。

歩くことも、話すことも出来ない。

火の中に置き去りにされたら、必ず死んでしまっだろう。

（死んでしまう・・・？私、誰かに捨てられた・・・？）

殴られるような頭痛を必死に耐え、白羽は考えた。
でも、もう限界に近かった。

長い若草は、白羽の体を優しく受け止めた。

「村の皆は、外へ逃げたか・・・！？」

麗斗が、炎の中、その勢いに負けずに声を張り上げていた。
大柄な男達の中の一人が、弱気な声で答えた。

「大人、それとかなりの子供は逃げました。
ですが・・・。」

「ですがじゃねえ！まだ誰が残っているのか！？」

麗斗の目が、鋭く光る。

「は、はい。山に一番近かった家の赤子が・・・。
親に置いてかれてしまったそうです。」

その答えは、麗斗の怒りを爆発させた。

「馬鹿者！何故助けに行かないのだ！！
・・・もういい。皆も避難所へ行け。怪我人の手当てをしてやっ
てくれ。」

麗斗は、そういうと、ロープを翻し、火が最も高く上っているところへと急いだ。

.

第三夜 猫

「ここ……か。」

麗斗は息をついた。

何しろ、村の端から端までを、猛スピードで走ってきたのだから。

この家は、山の一番近くにあり、火が燃え移った、最初の家だった。
……すでに、家の形は残ってはいないが……。

赤い炎と、飛び散る火花。

近くにいただけでも、呼吸が難しいほどの場所で、その声は聞こえた。

「……………赤子の鳴き声……………」

火の中から、小さく、か細い声が麗斗の耳に入った。

（まだ生きている……。）

麗斗は、近くの井戸から水をかぶると、
火の森へと、足を走らせた。

「・・・・・・・・。」

白羽はしばらくすると、立ち上がった。

いつもの白羽なら、倒れた時につぶしてしまった草花に、侘びの一言がでているはずだった。

が、『今の』白羽から、そのような優しい言葉は聞こえなかった。

猫が白羽の代わりに、草原に倒れていた。

白い、美しい毛並みに、楕円形の水晶のような首飾りをつけている。長い尻尾はバラの蔦のようにしなやかで、耳はピンと立っている。まるで、雪のような純白の猫だった。

『白羽』が言った。

「・・・・・・・・。私の力は、まだ半分も回復していない。
力が戻っていれば、こんな火事、すぐに元に戻せるのに・・・・・・・・。」

その声は、悲しみと・・・怒りに染まっていた。

「でも・・・皆は私を裏切った。
・・・信じてくれなかった。」

涙声なのに、怒りの声。
とても悲しい色。

立っている『白羽』の瞳^めは、
村の炎よりも深い、紅^{あか}。
怒りと憎しみに染まった色だった。
その目には、薄っすらと涙が溜まっていた。

だんだんと小さくなっていく、赤子の声。

時に大きさを増しては、次の声は消えるほどに薄くなっていった。

「・・・いたあ!!」

麗斗が声を上げる。

ふすまを開け、骨組みしか残っていない障子を突き破り、奥へ奥へと進んだ先に、赤子はいた。

赤子が寝ているベットは、下の布まで火が移りかかり、肌は、黒く焦げているところが、所狭しとあった。

その中で、赤子は一人、泣いていた。

親が迎えに来ることだけを、それだけを願って。

麗斗は迷う事無く、自分のロープを外し、それで赤子を包んだ。赤子の息が、少しずつ、落ち着いてきたのを確認すると、真っ先に出口へと急いだ。

が、行く手は、崩れた大黒柱によって、塞がれていた。

「マジかよっ!こんな時に!」

パチッ・・・パチッ

火花が、麗斗の頭の上で散る。

家の木が、火に燃えつくされかけていた。

麗斗の頭の上の木も、そうだった。

やがて、ガラガラッ！ と、音を立てて、木が降ってきた。

「クソッ！一か八かだ！！」

口を押さえていた手を離し、左右のバランスをとる。
そして、体制を前重心に変えると、大黒柱を飛び越えた。

「もう、時間が無いや。」

『白羽』が呟いた。

死んでいたような猫の耳が、ピクツと動く。

もう一人の白羽は、そのまま草に寝転んだ。

.

第四夜 静寂

猫がゆっくりと起き上がった。

背筋をピンと伸ばすと、そのまま足早に、その場を後にした。
立ち去る前に、白羽をしっかりと見ていた。

「あつち・・・。」

「つたく、村長も楽じゃないぜ。」

麗斗の独り言、勃発。

でも、腕の中で落ち着いてきた赤子の顔を見ると、少し静かになった。

あの後、大黒柱につま先をつつかえたものの、無事に出ることが出来た麗斗は、

行く前に立ち寄った、井戸まで直行。

赤子と自分に水を被せると、

まだ緑色の輝いていた草原に向かって、歩いてきたところだった。

細い道なので、倒れないように慎重に歩いていた麗斗だが、

草原に立っている、人影を見ると、危うく赤子を落としそうになっていた。

長く、白い髪の後姿。

白羽は視線に気づくと、麗斗の方に振り返った。

その目は、いつもの澄んだ淡い色だった。

そして、村の炎ではのかに紅く揺らいた。

麗斗は、それを無視すると、

山を下りる道まで、走った。

白羽は何も言わずに、それを見つめた。

『白羽。白羽が父さんを殺したんだ。』

麗斗は、自分にそう言い聞かせていた。
唇をかみ締めて、息を殺す。
やけに静かな夜だった。

零月零日。
ぜろがつぜろにち

一人の赤子が、『時の割れ目』といわれる異空間から生まれた。

透き通った白い肌と、輝くばかりの白い髪。

眠っている姿は、とても可愛らしく、それを見つけた人共は、神からの贈り物だと、勘違いした。

白い、羽根のように軽い赤子だった。

が、人々は、赤子の目が覚め、目を開いた瞬間、その赤子を海に流した。

赤子の瞳は、紅かった。

そして、村の者々が集まり、「自分らは馬鹿だった」と言い合った。
『時の割れ目』から生まれる者は、必ず『時精』ときのせいに関わっていると。
目が紅いのは、時精の力を持つ者だけだと。

その時、その村の村長は麗斗の父だった。

時精は、海に流されただけでは、死なないと、そう思った村長は、次の日、数人を赤子を流したところへと送り出した。

その時、過去の悲劇は始まった。

第五夜 贅

白い砂浜。

藍色に染まった夜空。

静かに、時を刻むように打ち寄せる波。

どんなに歩き回っても、その場に赤子の姿は見つからなかった。

海に沈んで藻屑となったか、

あるいは、時の力で過去に戻ったか。

村長達は、砂浜で話し合った。

災難が降りかかることも知らず。

しばらく話続けた時、

小さくなく、赤子の声がした。

駆け寄って見れば、白い髪の紅い瞳。

時精ときのせいの赤子が泣いていた。

腹が空いているのだろう。

村人は、幸運に感謝した。

今の状態ならば、すぐにでも殺すことが出来る。

が、それを村長は止めた。

「その赤子は、神々の贅に出そう。」

村長は、冷たく言い放った。

赤子はその声と共に、ピタリと泣き止んだ。

村の人々は、村長の腕の中にいる赤子を見るたび、眉間に皺を寄せ、赤子に冷たい視線を注いだ。

そのころは火山が活発的になり、村に被害が及ぶ為、毎年、神に贄をささげて、火山活動を抑えていた。

贄を捧げるには、自らの力で火山に登り、

火山口まできたら、自分で、煮え来るマグマの中に、飛び込まなくてはならなかった。

そんなこと、立つことも出来ない赤子に、できるわけが無い。

ということ、村長直々に登ることになった。

数人の人を、連れてのこと。

やっこのことで登りついた場所。

代表として、長が赤子を投げるようになった。

いくら時精としても、赤子を殺すのは、氣が乗らないものだった。
(だが、これも村のためだ。)

自分にそう言い聞かせて、長は赤子を炎の中へ、投げ込んだ。
赤子は、眠っていた。

赤子が火の中に消え、

村に引き返そうと、人々が方向転換をしたときだった。

突如、目の前が真っ白に輝く。

もう一度目を開けた時は、先程いた、火山口の手前だった。

そして、その真ん中には、光に身を包む、一人の少女がいた。

長く、銀のように輝く白髪。

雪のように白い肌。

首には、銀のリボンと、水晶のような石を付け、

淡い青色の衣を纏う、紅い瞳の少女。

人々が、一声に口にした。

「と、ときのかい時精……。」

時精は、細い腕を胸の前まで持ってくると、小さな手を握り締めた。

「……私を、それも小さな赤子を、殺そうとした？」

私がいなければ、この世は動けないのに……。」

鈴を転がしたような、可憐な声。
長をむくめ、皆がその場から動けなくなっていた。

少女の紅い目は、悲しげな色になっていた。
が、すぐに怒りに染めると、腕を横に上げた。
火山の炎が、ピタリと凍る。

景色全体が、時精以外、固まる。
石の世界のように冷たく、冷え切った世界。

「・・・これが、私の小さな復讐の始まり。」

そうつぶやくと、手のひらを人々に向けた。
石の様に固まった人たちは、引き寄せられるように火山の中に落ちていく。

その瞬間に、時はまた、動き出す。
人々は、炎の中に落ちていく。
悲鳴が、虚しく空に響いた。

『駄目！止めて！』

時精の中で、もう一人の時精が叫ぶ。
瞬間的に、時はまた止まる。

「何故・・・？この人たちは貴女を、私を殺そうとしたのに？」

少女が自分に手を当て、呟く。

『それは・・・。』

もう一人の時精の力が緩む。

その時、再び時は動いた。

人々は、火の海に消えていった。

『あ．．．。』

もう一人の時精が、涙声を出す。

「自分のしたことが、自分に返ってきてしまっただけ。
なんて愚かなの。人間って。」

そっぴいながら、時精は空中に足を運ぶ。

やがて、岩だらけの地面に足を付くと、その姿を消した。

その後に残ったのが、短い白髪の、紅い瞳の赤子だった。

・

第六夜 村

麗斗^{れいと}は、白羽^{しろは}の生まれた後、この世に生を受けたという。そしてその後、病弱だった母親はまもなく息を引き取り、白羽と同じ年の、小さな麗斗を、村長は一人で育ててきた。

が、赤子・・・白羽を贄に出す為、父親おも亡くす。

麗斗は大婆^{おおばあ}に預けられたが、父親が逝ってしまった後、村長が死んだ、という情報を誰も知らぬ前に、泣き止む事無く、嵐のように泣いたという。まるで、自分が殺したかのように、一番に泣いたという。

麗斗は、そのまま大婆に育てられた。そして、山の活動が終わったにも関わらず、長達が帰ってこない、と勘付いた人々が、山を登ってみたところ、長達の姿は見当たらず、あの、小さな赤子一人が残されていた。

村人達は、時精が長達を殺してしまった、と推測し、赤子をこのまま放って置くと、今度は村全体に被害が出るのではないかと恐れ、

赤子を連れて、村に戻った。

赤子はその後、大婆の下へと渡った。

その場にいた、同じ年の麗斗は、もう一人の赤子を見ると、やはり、大泣きしたのだった

そして、時精の赤子の側には、まれに、白い猫がうろついていて、麗斗の側には、その猫とま逆の、漆黒の色をした猫が、時々寄り添っていた。

その猫は、紅い燃えるような瞳を持ち、首下に青い透き通った石が、アクセとして付いていた。

五年の月日が流れると、大婆は麗斗に時精の話をし、殺された父親は、一緒にいる子に殺された、と言った。

麗斗は、酷く落ち込んだ。

部屋に籠りきり、食事もしなくなった。

が、数日後、麗斗が長になった時、

麗斗は、すぐさまもう一人の子を、大婆の家から追い出し、自分も、親の住んでいた場所に、住み戻った。

この頃から、時精の子のことを、村人は『白羽』と呼び始めた。

白羽の白い髪は、五歳児とは思えないほどの長さに伸びていき、羽根のように軽いことから、そう呼ばれていた。

そして、時精の白髪は、とても長かったとか。

が、問題の紅い瞳^めは、年が経つにつれ、徐々に色を薄くし、淡い、森の木漏れ日のような色へと、変化していった。

それから、災難が起こることもなく、白羽と麗斗はお互いを避けながら過ごして行った。
何事も起こらず、むしろ豊作が毎年続くと言う、穏やかな日々になっ
ていった。

白羽に寄り付く人は、それでも出なかった。

彼女の家に行くのは、麗斗だけ。

それも、父親のことを訊ねる為だけに、週に一回。

白羽は、その頃の記憶は一切残っていなかったため、

麗斗が、いくら怒鳴っても、首を傾げるだけだった。

短気な麗斗は、彼女の行動に、いつも腹を立てて帰っていた。

・・・その光景は、村の人々が嫌な眼で見つめることになっていた
が、

別の方向から見れば、仲の良い、兄弟喧嘩のようにも見えた。

白い猫は、それ以降、姿を現さなくなった。

同時に、黒い猫も、村に訪れることは無くなった。

第七夜 赤子

「私、麗斗君を怒らせるようなこと、したかな・・・？」

白羽はいつだってそうだった。

麗斗が帰ると、毎回そのことに首を傾げ、

「あ、夕ご飯の時間だ。」

と、すぐに切り替えていた。

白羽は髪が長い為、高等部でお団子ポニーにしていたが、それでも地面スレスレだった。

・・・つまり、かなりの長さになる。

彼女のロイヤルグリーン色の目は、年がなるにつれ、どんどん澄んでいき、

つられて、性格もマイペースになっていった。

麗斗は、逆に日に日に短気になっていったが、村の人達への思いやりは、強くなっていった。

そのせいか、村の人々も幼い村長についていくようになり、村全体が、纏まりつつあった。

ここまでは、白羽と麗斗の過去。

このころは、麗斗含め、村全体が一方的に避けていたが、白羽は、そんなことは知らなかった。

・・・むしろ、気が付いていなかった。

「ときのせい
時精・・・か。」

麗斗は、冷え切った夜空を見上げた。

腕の中で、赤子が小さく寝息を立てる。

よっぽど安心して居るのだろう。

赤子の頬の焦げ痕の上に、小さな涙がこぼれていた。
親を呼ぶ為に泣いた、涙の痕。

「こんな小さな子供を見捨てるなんて・・・。。」

・・・どんな親だよっ！」

唇をかみ締め、半分涙をこらえていった。
ちよつと頭に血が上ったが、赤子がおきそうになったので、また黙った。

「・・・そんな親でも、コイツには母さんや父さんもいるんだよな。」

麗斗にとって、それはとても羨ましかった。

・・・今の自分には、叶わない願い。

「麗斗様!!」

避難所に付いた麗斗は、即座に赤子の親を探した。
周りの声も、今の麗斗には、届かないようだった。
と、岩場の隅で、泣いている夫妻を発見した。
あの家の、持ち主だった。

「大丈夫ですか？」

麗斗は、とりあえず声をかけた。
向こうは、何も答えずに、ただただ泣いていた。

「はい、この子。」

泣く泣く母親に、腕の中の赤子をそつと渡した。

母親は、泣き止んだが、声がでなかった。

父親も驚いて、赤子が生きていたことに喜び合った。

麗斗は、その場をすぐに離れた。

「……れ？」

白羽が草原から起き上がる。

「私、何してたんだっけ……？」

髪の毛を結び直しながら、やっぱり首を傾げる。

と、結び止め用のゴムが、パチンと音を立てて切れてしまった。

「あ……。」

長い髪の為、ゴムが切れることは良くあるものの、
今回ののは、結構新しかった。

・・・ちなみに、髪は切っても切っても伸びるので、しょうがないのだ。

「どうしよう・・・。結わないと、邪魔になるんだよね・・・。」

と、切れたゴムを探そうと、草むらに手を伸ばした。
その手に、コッソンと何かが当たった。

「・・・?」

手にとつて見ると、夜空に光る、青白いガラス玉が二つ付いた、髪
ゴムだった。

ガラス玉は、少し濁っているようで、月の光に反射していた。

「・・・綺麗・・・。」

丁度、ゴムを失くしたので、白羽はその髪留めで髪を結った。
使いやすく、何かが抜けるような気がした。

村の炎は、治まりつつあった。

それを、何か白い光が囲っていた。

が、白羽はそれに気が付かなかった。

第八夜 草（前書き）

これからが、本章・・・かな？
そう思ってください。

第八夜 草

あの火事から、数日がたった。

村の再建は、麗斗によって着々と進められ、

白羽も、避けられつつも自分の家を建て直していた。

炎は、思ったよりも早く消え、そのために再建も早くとり行われるようになった。

また、麗斗が指示を出したのは、敷地を広げることだった。

それにより、小さな村は少しずつ大きくなっていった。

村の再建が終了し、のどかな日々が戻ってきた頃だった。

「村長様。近くで戦が起こるようです。」

「15歳以上の若者を、集めるようにと……。」

村人の一人が持ってきたこの言葉は、新たな波乱の幕開けとなっていた。

「んー……。」「

立て直した村中の、一番小さい家で、白羽は悩んでいた。

目の前の机に、沢山の薬草を置き、それらと睨み合っていた。

「これは火傷に使えるから、早めに作っておいて、
・・・えと、これは長くもつから後でもよし。
・・・で、これ・・・は・・・。」

と、一つの草を持ちあげ、目を丸くした。

「あれ？こんな珍しい薬草、見つけてたっけ？」

白羽の手の中には、漆黒の草が横たわっていた。

他の草の中で、一番短く小さく、

それでいて、とてつもない香りを発している草だった。

例えば・・・。

夏に、腐った魚を置き去りにしてしまった臭いと、

蛙などの死骸で、いっぱいになった入れ物の臭いを、かき混ぜたよう
うな・・・。

・・・とにかく、鼻がひん曲がってしまうほどの悪臭だった。

が、白羽は『とにかく』マイペースだった。

手に持っても平然とした顔で、じっと見つめていた。

普通の人から見れば、恐ろしく感じるほど・・・。

しばらく経ってから、草を机に戻すと、

「図鑑に載ってたかな・・・？」

と、奥の自分の部屋に戻っていった。

しばらくして、白羽はまた、狭い部屋へと入ってきた。

「ふう。ずっと使ってなかったからね・・・。
探すのに手間取っちゃった。」

みれば、彼女の服は埃まみれだった。

・・・いったいどこを探したのやら・・・。

額の汗を拭うと、黒い草の前に、

『薬草解剖図鑑』と書かれた、図鑑を開いた。

立っているのに疲れ、部屋の隅にある、木の椅子に腰掛け、
黙って黙々とページをめくっていた。

と、扉を開ける音がした。

「おいっ！白羽、いるか!？」

麗斗が、数人を従えて入ってきた。

白羽のいる、この小さな部屋は、扉を開けてすぐにあるので、白羽
はびっくりし、

そっと、扉を開けて、麗斗の前に出た。

（あれ？今日って、訪問の日だったけ？）

ふと、そう思いつつも、白羽は麗斗が来ることに、驚きはしなかつ
た。

ただ、扉を開ける音が、凄まじく、毎回飛び上がっているのだった。
赤い布を纏った、自分より少し大きい麗斗をみて、白羽はたずねた。

「麗斗君、どうしたの？もうお昼ご飯の時間だよ?。」

・・・。

聞くことが、なんとなくずれている白羽に対し、
麗斗は、平然と答えた。

「それはもう食べた。」

・・・そうじゃなくて、今日はお前に用があるんだ。」

口調は、いつもと違い、全く怒っていなかった。
けれど、どこか悲しい感じが含まれていた。

（麗斗君が、全然怒らない？ なにかあったのかな？）
いくら能天気な白羽でも、何となく勘付いた。

「お前、毒草なんて集めてないよな？」

「うん。全然。」

村人達が言っていたのは知っているので、聞かれても全く動じなかった。

というか、逆にそんなことを聞く麗斗を不思議に思った。
気を取り直して、白羽が切り出した。

「私が集めてるのは、薬草とか、薬に出来るものだけだよ？
あ、もしかして、取っちゃいけなかった？」

焦る白羽に、麗斗は首を横に振った。

「いや、別にそれはいい。むしろ好都合だ。」

白羽、今から三百個、解毒薬を作ってくれるか？」

「・・・三百個!？」

いきなりの注文に、白羽は戸惑った。

「・・・作れないのか？」

「うっん！？そんなことはないけど・・・。
材料が足りるかなあ・・・って・・・。」

白羽の返答に、麗斗は後ろを向き、
控えていた3人と、頷きあった。

「そっいうと思った。」

後ろにいるのは、俺の知っている限り薬草集めの名人だ。
手助けをしてくれると思う。

だから、引き受けてくれないか？」

麗斗の目は、鋭く、真剣だった。

いつもの態度とは、全く異なっている麗斗をみて、白羽は固まった。
そして、頷いた。

「・・・うん。やってみるよ。」

「ただ・・・。」

白羽は、気になっていたことを言うことにした。

麗斗は、「なんだ？」と、不機嫌そうに聞き返した。

「何でいきなり・・・。解毒薬が三百個も必要になったの？
村の人達の中にも、私以上の腕を持った薬師くすりだっているのに・・・。

わざわざ私になんて・・・。」

麗斗が白羽を避けているような気は、何となく判っていた。
なのに、何故、私なのかと、白羽は問う。

麗斗は、少し俯いてから、頑固に首を振った。

「お前は知らなくてもいい。

むしろ、知ってほしくない。」

三人が材料を探しに行ったあと、麗斗は帰っていった。
はっとして、白羽は部屋に戻り、薬を作る準備を始めたが、
相変わらず、頭の中は混乱していた。

そして、そのことにより、黒い草のことも忘れていた。

第九夜 薬

「お腹すいた・・・。」

あまりの量に愚痴を言う白羽。

仕事（しかもかなり久しぶり）をやっていると、どうしてお腹が空くのか。

知っている人がいたらいいのに、と白羽はこっそり考えた。

・・・ちなみに今の時間は、日が暮れた、夕ご飯の時間であった。

図鑑を見なくても作り方を把握してしまうくらい、この作業は長かった。

いや、正しく言う和白羽にとって長く感じてたのかもしれない。

なんていったって、時計のない、4畳半くらいの切羽詰った部屋に籠りきっているのだ。

誰であっても、退屈になるのは明らかである。

麗斗が頼みに来て数時間。

彼によって手配された3人は、すぐに山に消えたかと思うと、大量の草葉を抱えて戻ってきた。

それも、すべて解毒薬に必要なものばかりで、白羽はその速さに一瞬呆然とした。

3人のうち、一人は白羽でも話し相手になってくれる人だったので、どう探しているのか、白羽が聞いてみたところ、

「慣れです、慣れ。」

と、微笑んで、また出かけていった。

後の二人は白羽を嫌っている、村人達の一員だったので、話すことはもちろん、呼びかけられても無視という態度だった。その冷たい態度に、白羽は一時切なる時もあったものの、村長である麗斗の頼みごとを優先するあまり、そんな感情もどこかへ消えていた。

「・・・っ?！」

頭辺りに、なにか硬いものがぶつかつた。

それは草だらけの机に転がり落ちると、コトンと音を立てて床に落ちた。

小石だった。

「出てけっ！化け物！」

小さな窓の外から、暗闇に混じって声が聞こえた。

幼い男の子の声だった。

白羽が窓の外をのぞくと、子供が数人、少し離れた草むらに隠れていた。

だいぶ暗かったが、白羽の目は、草の動きで人がいることを認識した。

子供達は、白羽が見ているのに気が付くと、また小石を投げつけてきた。

今度は家に入らなかったもの、少し脆い造りの白羽の家にゴツと音を立てた。

最初と同じ声の子供が、また言った。

「この前の火事も、お前のせいだろっ。」

お前が山の神々を怒らせ、この村に火をつけたんだっ！」

はき捨てるようにいった声も、最後の辺りはかすれていた。そしてまた、小石を投げつけると、周りの子供達をつれて闇に消えた。

白羽は、なんとなくその場から動けなかった。自分に当たった石を拾うと、それを見つめた。ごつごつしていて、灰色に染まった、大地の創りだした結晶。それが、人を悲しくされるものにもなることを、白羽は初めて知った。

『化け物』

（あの男の子はそういつたっけ。）
急にさっきまでの食欲は失せ、悲しい気持ちになった。なにも、手につきそうにない状態と化した。

それから数時間後。
再び扉から、音が鳴った。

「白羽・・・？
入るぞ。」

麗斗だった。
反応がない家の中を、キシリと床が音を立てる。扉の裏に回りこみ、一人が通れるような、かなり細い扉を開ける。開けた途端、強烈な臭いが麗斗の鼻を刺した。

解毒薬の臭いだった。

「・・・白羽？」

白羽は、小さな部屋の奥隅で、机にふつつぶしていた。
寝ているようだった。

そして、白羽の周りには、
きっちり十個ずつ固められた瓶が、二十九個と一つ、置いてあった。
白羽の手には、最後と思われる小瓶が収まっていた。
麗斗は、ふうとため息をついた。

「白羽らしいな、全く・・・。」

周りを見渡して、手ごろな毛布を白羽の上にかけてやると、
そのまま静かに出て行った。

「良くなる兆しがありません。長。」

「・・・わかってる。」

問題は相手の攻撃法だ。

と、麗斗は思った。

弓矢や特攻、騎馬での突破が普通なのだが、

この争いは違った。

自分たちは何もしていないというのに、何故か毒状態に陥る人がいるのである。

無論、向こう側も何もしていないはずなのだが・・・。

「解毒草も、現在では入手困難。

今の皆は、毒を恐れて出ようとしない。

・・・不味いな。」

項垂れ、悩む麗斗の姿を、

一人、影で見ている人がいた。

・・・人ではない。猫だった。

闇にまぎれるような黒猫が、麗斗の家の窓枠に座り、鳴き声を立てずに、枠から飛び降りた。

第十夜 紅

白羽が目を覚ましたのは、次の日の昼だった。

「・・・っは！？もうこんな時間！？

いけない・・・私としたことが・・・。」

慌しく椅子から離れると、次に机の上の薬を抱えた。

（散々苦勞して作ったものだ。慎重に持っていかなければ・・・。）

そんなことを考えていたはずの白羽だが、
やっぱりお決まりとして、抱えた直後に本につまずき、
ズーンッと、大きな音と共に、ほこりの中に突っ込んだ。

宙に舞う薬の入った小瓶。

もちろん止められる術が、今の白羽に有るわけ無かった。

落ちる直前、

誰かが白羽の部屋に入ってきた。

「・・・馬鹿！

薬の材料集めに苦勞した、あいつ等のみにもなってみろ！！」

麗斗がとっさに薬を救ったおかげで、薬は無事となったが、

白羽はこの後、散々怒鳴られることになった。

説教（？）の時間が終わると、麗斗は薬を持って出て行った。
どうやら、長じきじきに来なければならぬほどの、急ぎだったようだ。

そんなことはさも知れず、白羽は怒鳴られたことにションボリとしていた。

髪を結い直し、さて何か食べようとした時、
外で大きな地響きが起こった。

地響きと同時に、火花が舞い散ってくる。
立ち直ったばかりの村は、あっという間に火に飲み込まれたみたいだった。

家の外から、細く叫び声が聞こえる。

子供が泣く声、逃げ走る音、家が崩れる音・・・

全てがよくない兆しのように聞こえ、白羽を怯えさせた。

「空襲・・・だと!？」

こっちは戦力もまともに備わっていないのにつ!!」

「長!村の大半が空襲により焼失!

もう逃げるしか道はありませんっ!!」

「・・・クソッ!!」

皆、村の者々をつれて、山下の隠れ家へ!」

山を二つ程越えた、大きな国からの攻撃のようだった。

次々に放り込まれる鉄の塊。

それにより、近くは炎の海になり、逃げる人を迷わせた。

白羽もそうだった。

家が焼けて、崩れる音がしたと同時に出てきた白羽は、

涙目になりながら、行く先のない、あの細い道を歩いていた。

大好きだった草原も、今回は赤く燃え、白羽を受け入れてはくれなかった。

そして今の白羽の瞳には、薄く紅い光が差し込んでいた。

そして一人、子供が転び、火に囲まれそうになったのを見、

「あぶないっ!」

と、叫んだ。

青白い光が、白羽の周辺を包み込んだ。
髪留めのゴムに、少しひびが入る。

次の瞬間には、世界は灰色に染まり、ピタリと動かなかった。
揺れる炎の先まで、熱を帯びずに固まった。
もちろん、その場に居た子供も、叫ぶ声も。

時が、止まった。

第十一夜 尻尾

「・・・え？」

あたりは炎の海で、汗が止まることなく流れていた・・・はず。子供が泣いて、逃げられなくなりそうになっていた・・・はず。

それは少し前、時が止まる前の「過去」に過ぎなかった。

空から雷のように堕ちてくる爆弾は、空中でピタリと止まり、村が焼けていく、草が燃えていくにおいさえも無くなり、すべての生けるもの、含め、炎、鉄、人の表情・・・

すべてが色を失い、灰色の世界と化していた。

混乱したのは、いうまでもなく白羽だった。

「・・・え？えっ!？」

なに？何が起こっているの!？」

慌てて辺りを見回してみるが、視界の隅から隅まで、灰色一色。何が起ころうとも、動きそうに無かった。

と、足元に温もりを感じた白羽は、多少怯えつつ、足元に目を移した。

「・・・え？」

猫ちゃん・・・？」

猫がいた。

どこにでもいそうな野良猫ではない。

真っ白な毛並みは、どの生き物よりも繊細で軽やかに見え、

暗闇にも負けないような紅い瞳を持ち、ガラス玉のように淡く光を発している。

ピンとした耳と、長い尻尾が微かに揺れ、

細くしなやかな首元には、水晶と似たような透明な石が、純白のりボンで留められている。

女神が猫の姿をとるなら、このような姿になるのではないか、と思うほどの猫だった。

何がおきたのかわからない白羽は、自分以外に動いているものを見つけたからか
それが譬え猫であつたとしても、抱きついてしまふほどだった。

「君・・・動けるの？」

どうしてこんな風になっちゃったんだろうね・・・」

猫が答えるはずが無い。

が、質問せずにはいられなかった。

問うことができる「人」がいただけで、十分だった。

が、猫はその言葉を耳にするなり、白羽の腕から抜け出した。

ポカンとして、座っている白羽の前でちょこんと座ると、その優雅な尻尾で、炎に巻き込まれそうな少年を指した。

巻き込まれる、という恐怖で屈みこんでいる少年は、炎が動かないというのにまったく動かない。

灰色になったまま、一ミリも動かない。

白羽はますます混乱した。

「どういう意味・・・？」

世界が一時停止でもしたってことなの・・・？」

まだわからないのか、とでもいうかのように

猫は軽やかに立ち上がると、少年のもとに近づいた。

そして少しずつ、少年の体を押し、動かし始めた。

その行動を見て、白羽もはっとした。

「あ、いつ動き出すかわからないものね。一時停止だとしたら・・・」

だけど。

そのこも安全なところに連れて行ってあげなきゃ・・・だよね？」

頷くことは無いが、猫は尻尾をゆらりと動かした。

「
は？」

村長ならぬ、麗斗。

彼までもが混乱していた。

混乱するな、というほうが不可能ではあるが。

彼は、村で逃げ残りを探し出しているところだった。

幸い、大事に至る寸前で村人は非難したそうだが、自分の目で見ないことには信じられず、

周りの意見を押し切って、村に戻ってきたのだった。

それが、だ。

自分の守ってきた村は、二回わたに亘わたって炎に飲み込まれた。
それだけではない。

現在の村は、炎どころか、色や生命、すべてを失っているようだった。

啞然として立ち尽くす麗斗の前に、黒い影が過ぎった。
気を取り戻し、一歩後に後退する。

影は小さく、麗斗の足元に来ると動かなくなった。

「・・・は？」

猫・・・？」

尻尾以外、何も動かさず、礼儀正しく座る猫。

夜の暗さに溶け込みそうな漆黒の猫。

耳の内側だけが、健康的なピンク色だった。

黒い鼻と、すらりとした目尻。

瞳は紅く、爛々（らんらん）と光っている。

短くとも、シルクのような艶を放つ毛は豊かで、

首元には、蒼く輝く透き通った石が、黒く細いリボンで付いていた。

世界中のどこを探しても、このような猫はいまい。

そう思わせるような、黒猫だ。

「……。」

お前、生きているみたいだけど・・・
なんていうか、この状況、理解できるか？」

やはり麗斗も混乱しているようだった。

猫は依然として動かず、泣き声も発さず、沈黙を守り続けた。
気まづくなっただのは麗斗だ。

「……………」

猫に話したって、なにもわからないことくらい、わかってるさ。」

そのまま猫を通り過ぎ、村に一步足を踏み入れようとした。
猫が鳴いた。

多少の時間をとり、麗斗は振り返る。

猫が立ち上がり、固まる麗斗を通り越し、先に村に立ち入ってしまった。
った。

結局、なにがしたいのかわからない麗斗にとって、猫の行動は微妙なものであった。

硬直する麗斗を待つように、猫は頭を回転させ、真っ直ぐに麗斗を見た。

「・・・わかったよ。」

ついて行けばいいんだろ？」

猫に続いて、麗斗の足は村に踏み入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2078f/>

時精物語

2010年10月10日07時11分発行